2020年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　13：15〜14：15　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないようにしてください。

7．一度記入したマークを修正する場合，しっかりと消してください。消し残しがあると，マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。

8．満点が100点となる配点表示になっていますが，国文学専攻（英語外部検定試験利用入試を除く）の満点は150点となります。

一　次の文章は、ドイツの作家カール・クラウス（一八七四～一九三六）の言語論を踏まえて書かれたものである。クラウスは、言葉には思考内容などを伝達する働きと、それ自体が「かたちを成す」働きがあると考えている。後者は、言葉が人間に対して、多面性を持つものとして立体的に立ち現れてくるということであり、クラウスはこの働きを重要視している。これを読んで、後の問に答えなさい。（50点）

ある言葉がかたちを成し、〈しっくりくる〉とか〈ぴったり合う〉と感じる場面、不意にある言葉が際立ち、そこから延びる他の言葉やイメージ等への連関に目を開く場面とは、典型的には、言葉を選び取る場面のことだろう。日常の生活のなかで我々は、〈しっくりこない〉という違和感を頼りにしながら、言葉から言葉へ連想を広げ、言葉同士を比較していく。それはもちろん、選び取るという能動的な実践でありながら、なお、すぐれて受動的な出来事でもある。なぜなら、言葉を選び取るとは、正確には選ぶというよりも、むしろ言葉の方から迫ってくることであり、〈しっくりくる〉という瞬間が訪れるのを待つことにほかならないからである。

では、こうした体験ができるということには、具体的にはどのような重要性があるのだろうか。言葉の多義性を把握し、立体的な理解ができるということには、はたしてどのような重要性があるのか。多義的な言葉をそれとして使いこなせなくともコミュニケーションは可能なのではないか。多くの言葉が多義的であるというのは、むしろ言語の習得や運用のコストを高めているのではないか。だからこそ、国際共通語となることを目指してつくられる人工言語は、多義性を排除する傾向があるのではないのか。

クラウスはまさに正面からこの問題に切り込んでいる。まず、彼は、言語浄化主義や言語融合主義への批判を通して、(1)言葉の多義性が切り詰められることの弊害を指摘している。長い歴史をもち、多様な生活の文脈のなかで頻繁に用いられ、それゆえ自ずと多義性を備えている言葉を突如として別の言葉に換えてしまえば、(2)シイ的にあてがわれたそのよそよそしい言葉は、かたちを成す可能性がないだけでなく、道具としての機能すら果たしにくくなるということである。

しかし、この指摘に対して、言葉から多義性が失われても道具として完全に機能しなくなるわけではない、という反論があるかも知れない。言い換えれば、言葉を立体的に理解できるというのは言語的コミュニケーション一般を可能にする不可欠の条件ではない、ということである。多義性を切り詰めた場合には言葉の表現力は確かに(3)ヤせ細るだろうが、その代わり、習得も運用も容易になるだろう。そうなると、問題は、複雑で精密であることと、単純で利便性があること、そのどちらをとるかというトレード・オフの問題に過ぎないのではないか、そう言われるかもしれない。

クラウスならば、これは問題を矮小化し過ぎていると再反論するだろう。というのも、彼によれば、多義的なものとして言葉を理解し使いこなせなくなれば――とりわけ、類似した言葉のなかからひとつをしっくりくる言葉として選び取るという実践ができなくなれば――、表現の繊細さや豊かさを失うだけではなく、(4)重要な倫理も失うからである。そして、だからこそ、〈かたちを成すものとしての言葉〉という側面は、クラウスにとって生涯を通じて最も重要なものであり続けたのである。

では、それはどのような倫理なのだろうか。クラウスによれば、言葉を選び取るというのはそれ自体が人のとるべき一個の責任であるという。彼がそう特徴づけるのは、さしあたり、我々はしっくりくる言葉を探す努力を放棄できるという、単純な理由による。我々は日々言葉を選び取るという実践を繰り返しているが、それと同じくらい、しばしば選び取らずに済ませているだろう。たとえ、この言葉ではしっくりこないという違和感があったとしても、妥協してその言葉でお茶を濁したり、あるいはそもそも違和感すら抱くことなく、曖昧で便利な言い回しを多用して済ませたりすることも多いだろう。

自分が用いようとしている言葉に思いを凝らし、吟味して選び取るというのは、人に課せられている最も重要な責任だが、現状は最も軽視されてしまっていると、クラウスは (5) を鳴らし続けた。その彼の問題意識が凝縮した叙述を引用しておこう。一九三一年六月に『炬火』に掲載された論考の一節である。

> 他人が書いたものに目を開くとまではいかないにしても、せめて自分の言葉に耳を澄ますようにさせ、それと知らずに日々口にしている諸々の意味を追体験してもらうことができるなら、人間にとって益するところが大きいだろう。慣用表現

の活性化、日常の交わりで使う決まり文句の鮮度を高めること、かつては意味をもっていたのに今では物言わなくなった言葉の身元確認、それらを人間に教えることは有益だろう。……根源に近づけば近づくほど、戦争から遠ざかるのだ。もしも人類が常套句をもたなければ、人類に武器は無用になるだろうに。誰しも自分の話す言葉に耳を傾け、自分の言葉について思いを凝らし始めなければならない。そうすれば、すべての失われたものが蘇るだろう。

こうした彼の訴えは、いかにも唐突であり、また滑稽なほど大袈裟なものに映る。しかし、当時彼が置かれていた状況、彼が見つつあった事態をカンガみるなら、むしろこれが不気味なほど正確な予言であったことが分かる。すなわち、彼がこれを書いた翌月の一九二一年七月にナチス内部のアドルフ・ヒトラー独裁体制が確立し、そのおよそ十年後には国会議員選挙で全体の四割近くの支持を受けて、ドイツに合法的にナチス国家が誕生したのである。ナチスこそ、「宣伝省」という歴史上でも類例を見ない機関を有し、マス・メディアを駆使し、常套句を駆使したプロパガンダや演説によって人々を誘導して、世界を戦争と悲惨に巻き込んだのであり、クラウスが予見していた事態の最悪なかたちがそれであったと言えるだろう。

ヒトラー本人が『わが闘争』のなかで説明しているように、ナチスのプロパガンダの言葉は、彼の考える闘争に勝利するという「目的のための手段」以外の何ものでもない。できるだけ多くの大衆の（知性ではなく）感情に訴えかける強い言葉によって、彼らの心に入り込み、「民族の自由と独立」や「国民の名誉」を守る闘争に動員することが肝心だという。それは具体的には、国籍、人種、民族、性別、政治信条等に関して、レッテル貼りを繰り返して人々のステレオタイプを強化しつつ、敵味方の対立の構図を単純化することであり、そうして「極悪な敵に対する怒りと憎悪の念を高める」ことである。

多面性を徹底的に排除した言葉を繰り返す、こうしたヒトラーの戦略が実に効果的であったことは、歴史が証明している。それはまさに常套句の氾濫、決まり文句の洪水であり、それが人々を流して思考を停止させ、単一の方向に誘導していく過程であった。

ヒトラーの陶酔的な演説は聴く大衆をも酔わせ、宣伝省が新聞やラジオ、テレビ、映画など様々なメディアを通じて流したプ

ロパガンダは、その高揚を戦争や殺戮へと誘導していった。繰り返し流れてくる常套句、その音声上のリズムや抑揚にただ身を任せ、浸っているときに忘れ去られているのは、まさしくかたち成すものとしての言葉の側面であり、言葉を選び取るときに生まれる〈これではまだしっくりこない〉〈これでは……過ぎる〉といった「迷い」である、そうクラウスは主張している。

そして、(7)彼はこの「迷い」を、我々に対する「道徳的な贈り物」と呼んでいる。これにはいくつかの意味合いが含まれているだろう。ひとつは、我々に受け継がれた文化遺産としての言語には、無数の多義語が含まれ、互いに複雑に連関し合っているということである。〈しっくりこない〉〈どうも違う〉といった迷いは、類似した言葉の間でしか生まれない。我々は、迷い、ためらうことを可能にする言語を贈られているのである。

それから、この迷いの感覚がとりわけ道徳的な贈り物であるのは、それが常套句の催眠術にかからないためのわずかな拠り所であるからだ。出来合いの常套句で手っ取り早くやりすごし、夢見心地でうっとりしているときに、言葉に意識を向けることはできない。迷うためには、醒めていなければならない。そして、しっくりくる言葉を体験するとき、言葉が胸を打ち、かたちを成すとき、人はこの上なく覚醒している。言葉は、「陶酔によってではなく、この上なく(8)メイチョウな意識によって存在へと汲み上げられる」のである。つまり、ここで求められているのは、醒め続けることであり、しっくりくる言葉を見出すまでは妥協しないよう努める責任、どこまでも自分を欺くまいとする倫理である。その意味で、しっくりこないという感覚が湧いてくるのは道徳的な贈り物であると、クラウスは指摘しているのだろう。

現在のマス・メディアが、クラウスが直接対峙していたものと同様の影響力をもっていないという見方は、多分に疑わしい。だが、たとえ仮にその見方を受け入れたとしても、状況はむしろさらに悪くなりつつあると言えるのではないか。自分の主張として他者の言葉をそのまま反復することは、まさにソーシャル・メディア・サービスの恩恵を受ける現在の方が遙かに簡単である。実際、いま急速に拡大しているのは、他者の言葉に対する何の留保もない相乗りと反復に過ぎないのではないか。秒単位のタイムスタンプが押された言説がリアルタイムで無数に流れる状況にあっては、言葉を発する方も受ける方も、自他の言葉に耳

を澄ますどころか、時間に追い立てられ、タイミングよく言葉を流す即応性に支配されているのではないか。「リツイート」や「シェア」等の反射的な引用・拡散や、「いいね」等の間髪入れない肯定的反応の累積がもたらすのは、それによって単に重量を増した言葉が他の言葉を押しのけるという力学であり、かつてない速度と規模をもつデマや煽動の生産システムではないのか。あるいは、そうした引用・拡散や肯定的反応を誘うような言葉を発するという、絶え間ない常套句の生産システムではないのか。称賛も非難も、議論や煽り合いも、結局のところ常套句（あるいは、それよりさらに寿命が短く適用範囲の狭い流行語）の使用へと硬直化し、その反復や応酬の勢いと熱量が、物事の真偽や価値の代用品となってしまっているのではないか。そうして、我々が向かおうとしているのは、重量と勢いと熱量のある声への――その声を代表する誰かへの――「迷い」なき同調と一体化の空間なのではないか。つまり、我々は結局、誰かに対して、マス・メディアを介することすらなく、じかに身を任せるようになりつつあるだけではないか。否、むしろ(9)我々は、誰かですらないような、空気や雰囲気や流れといった曖昧な何かに、じかに融け込みつつあるだけではないのか。

これらの問いすべてにイエスと答えることは、あまりにシニカルで悲観的に過ぎるだろう。情報技術の革命的な進歩と、それを個々人に開放するプラットフォームの整備と、それと共に立ち現れてきた社会の新たな様相に対して、不信を振り撒いているだけなのかもしれない。しかし、これらの問いを杞憂と言い切ることもできないはずである。誰しも自分の話す言葉に耳を傾け、自分の言葉について思いを凝らし始めなければならない、というクラウスの呼びかけは、他のどの時代よりも、まさにいま現在の我々に突きつけられていると言えるだろう。

（古田徹也『言葉の魂の哲学』による）

〔問一〕 傍線(2)(3)(6)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で一画一画明確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)「言葉の多義性が切り詰められることの弊害」とあるが、本文中ではその最悪のかたちとしてヒトラーの時代の例が挙げられている。これを日本の戦時を例にとって考えるとどのようなことになるか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「大東亜共栄圏」「興亜」などの壮大な理想を語ることで、アジアの国々への侵略を正当化したこと。

B 大本営が戦果を過大に発表し、本当の戦況を知らせないことで、国民の不安を解消しようとしたこと。

C 外国語を禁止し、日本語だけを使わせることで、日本語や日本文化の優位性を信じ込ませようとしたこと。

D 「贅沢(ぜいたく)は敵だ」というスローガンを連呼して耐乏や忍耐の意義を強調し、物資不足への不満を封じたこと。

E アメリカ人やイギリス人を「鬼畜米英」と呼び、その実態を考えないようにさせ、戦意を高揚させたこと。

〔問三〕 傍線(4)「重要な倫理」の内容をもっとも分かりやすく言い換えている箇所を本文中から二十五字以上二十八字以内で抜き出し、その最初と最後の五文字を書きなさい。(句読点等も一字と数える)

〔問四〕 空欄(5)には慣用的な表現の一部が入る。もっとも適当な漢字二字の語を答えなさい。

〔問五〕 傍線(7)「彼はこの「迷い」を、我々に対する「道徳的な贈り物」と呼んでいる」とあるが、クラウスがそのように言う理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 言葉の選択が複雑になることは、我々を得心がいくまで考えるように導くことになるから。
B 類似した言葉が多く存在することは、繊細で豊かな言語表現を生み出すことになるから。
C しっくりこないという感覚があることは、言葉の使い方を慎重にさせることになるから。
D 言葉の多様性を知ることは、自分の言い方が唯一のものでないことを知ることになるから。
E 言葉を迷う経験は、慎重な言葉遣いで人を傷つけないように配慮することにつながるから。

〔問六〕 傍線(9)「我々は、誰かですらないような、空気や雰囲気や流れといった曖昧な何かに、じかに融け込みつつあるだけではないのか」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ヒトラーの時代は常套句の氾濫によって、人々は政権の狙い通りに動かされたが、現代はネットワークに流れる言葉の氾濫によって、その場その場の感情に流されるようになり、安直な世論が形成されつつあるということ。
B ヒトラーの時代は宣伝省が大量の常套句を流し人々を洗脳していったが、現代はマス・メディアに取って代わったソーシャル・メディア・サービスがその役割を果たして、人々の価値観をコントロールしつつあるということ。
C ヒトラーの時代は決まり文句の洪水によって人々の思考が単純化され、戦争に向かったが、現代はネット上で反復され、拡散される言葉によって、人々の思考は停止状態となり、いつでも煽動される状態が作られつつあるということ。
D ヒトラーの時代は政権側の演説と大量の情報が人々を酔わせて戦争に駆り立てたが、現代はネットワーク上で誰でも自由に発信できる時代になったので、誰でもが人々を思う方向に動かせる状態になりつつあるということ。
E ヒトラーの時代は政権自らがマス・メディアを作って情報をコントロールして政権批判を封じていたが、現代はネットワークに大量の情報が繰り返し流されることで、情報の送り手を気にしない雰囲気が浸透しつつあるということ。

〔問七〕 この文章からうかがえるクラウスの言語観に合致するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 言葉は誤解される程度に伝われば十分だ。
B 言語は思想の母であって召使いではない。
C 言語は現実の不完全な代理でしかない。
D 言葉は音声のリズムと抑揚の魔術に支配される。
E 言葉は灰色の現実を緑なす美しいものに変える。

〔問八〕 この文章の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 言葉が多義的であることは、伝達機能の点では障害になりうるが、それが人を立ち止まらせ、考えさせることになるので、多義性を切り詰めることは、結局、人間の思考を単純化させ、感情に流されやすくすることになる。
B 言葉を伝達のための道具にしてしまうと、表現の繊細さを失うだけではなく、物事を多面的に捉える能力も失われるので、曖昧でも勢いのある言葉に人々が同調しやすくなり、政治家に好都合な状況が生まれることになる。
C 自然言語は多義的でその習得や運用が難しいが、真のコミュニケーションのためには必要なものであり、単純な人工言語を用いることは、複雑で異質な考えを排除して、安定してはいるが均一な社会を作り出すことになる。
D 人の言葉を引用・反復していると自分の言葉を失うことになるが、しっくりくる感触が生じるのを待つことを続ければ、言葉の物量や勢いに流されることなく、独自の言葉で物事の真偽や価値をきちんと捉えられるようになる。
E 多義的な言葉を使うことは、伝統的な物の見方を継承していくことでもあるので、単純な流行語や新語などに惑わされずに昔からある言葉を大事にすることが社会の多様性を保障し、紛争や戦争を回避することにもつながる。

二　次の文章は、平安時代の女房、赤染衛門についての説話である。これを読んで後の問に答えなさい。（30点）

今は昔、大江匡衡が妻は、赤染時望といひける人の娘なり。その腹に挙周をば産ませたるなり。その挙周勢長じて、(1)文章の道にやむごとなかりければ、公に仕うまつりて遂に和泉守になりにけり。

その国に(2)下りけるに母の赤染をも具して行きたりけるに、挙周思ひかけず身に病を受けて日頃わづらひけるに、重くなりければ母の赤染嘆き悲しんで、思ひやる方なかりければ、住吉明神に御幣を奉らしめて挙周が病を祈りけるに、その御幣の串に書きつけて奉りたりける、

(3)かはらむと思ふ命は惜しからでさても(4)別れむほどぞ悲しき

と。その夜、遂に癒えにけり。

また、この挙周が官望みける時に、母の赤染、鷹司殿にかくなむ詠みて奉りたりける、

思へきみ頭の雪をうち払ひ消えぬさきにと(5)急ぐ心を

と。御堂この歌を御覧じて、(6)いみじくあはれがらせたまひて、かく和泉守には(7)なさせたまへるなりけり。

また、この赤染、夫の匡衡が稲荷の祢宜が娘を語らひて愛し思ひける間、赤染がもとに久しく来たらざりければ、赤染かくなむ詠みて、稲荷の祢宜が家に匡衡がありける時にやりける、

(8)わがやどのまつはしるしもなかりけり杉むらならば(9)訪ね来なまし

と。匡衡これを見て「恥づかし」とや思ひけむ、赤染がもとに返りてなむ住みて、稲荷の祢宜がもとには通はずなりにけり、となむ語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』による）

注　大江匡衡……文章博士などを歴任した文人。　鷹司殿……藤原道長の正妻、倫子。　御堂……藤原道長。
稲荷……伏見稲荷大社。　わがやどの……「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（古今和歌集）を踏まえた歌。

〔問一〕　傍線(1)(4)(6)(9)の解釈としてもっとも適当なものを、左の各群の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

(1)　「文章の道にやむごとなかりければ」

A　学問の道に励む志が高かったので
B　学者としては身分が高かったので
C　漢学にたいへんすぐれていたので
D　和歌の才能がすばらしかったので

(4)　「別れむほどぞ悲しき」

A　息子のために匡衡と別れたことが悲しい
B　自分が死んで息子と別れることが悲しい
C　息子が自分よりも先に死ぬことが悲しい
D　自分がかわりに病気になることが悲しい

(6)　「いみじくあはれがらせたまひて」

A　たいへん感動なさって
B　とても悲しくなられて
C　ひどく残念に思われて
D　はげしく苦悩なされて

(9)「訪ね来なまし」

A 訪ねて来るにちがいないよ
B 訪ねて来ることはないよ
C 訪ねて来たらいいのに
D 訪ねて来ただろうに

〔問二〕 傍線(2)(3)(7)の主語としてもっとも適当なものを、左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

A 赤染　B 匡衡　C 挙周　D 鷹司殿　E 御堂

〔問三〕 傍線(5)「急ぐ心」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人生は雪のようにはかないので来世に備えようとする気持ち
B 子どもの任官がむずかしいことを知りつつ抗おうとする気持ち
C 子どものためなら自分が死んでもかまわないと思いつめる気持ち
D 老い先短い身でありながらも鷹司殿に奉公したいと思う気持ち
E 自分が生きているうちに子どもの任官を見たいと願う気持ち

〔問四〕 傍線(8)の中には掛詞がある。掛けられている言葉を漢字を用いて書き分けて答えなさい。

〔問五〕 この説話は三つの話で構成されている。この三つの話に共通する主題は何か、五字以内で答えなさい。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、返り点・送り仮名等を省いた箇所がある）（20点）

楚恭王与晋人戦于鄢陵。戦酣、恭王傷而休。司馬子反渇而求飲、豎陽穀奉酒而進之。子反之為人也嗜酒而甘之、不能絶口、遂醉而臥。恭王欲復戦、使人召司馬子反、子反(2)以心痛。王駕而往視之、入幄中而聞酒(3)。恭王大怒曰、今日之戦、不穀親傷。所恃者、司馬也。而司馬又若此、是亡楚国之社稷而不率吾衆也。不穀無与復戦矣。於是罷師而去之、斬司馬子反為僇。故豎陽穀之進酒也、非欲禍子反也。誠愛而欲快之也。而適足以殺之。

（『淮南子』人間訓による）

注　鄢陵……地名。　司馬……将軍。　子反……人名。　豎……雑役夫。　陽穀……人名。　心痛……胸の痛み。
駕……車に乗る。　不穀……王や諸侯が謙遜していう自称。　社稷……国家。　師……軍隊。
僇……さらしもの。

〔問一〕 傍線(1)「為人」の読みを全て平仮名で書きなさい。

〔問二〕 空欄(2)(3)に入る語としてもっとも適当なものの組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (2) 求 ／ (3) 臭
B (2) 答 ／ (3) 声
C (2) 求 ／ (3) 気
D (2) 辞 ／ (3) 声
E (2) 辞 ／ (3) 臭

〔問三〕 傍線(4)「若此」の意味内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 本分を忘れて痛飲したこと
B 戦場において負傷したこと
C 戦争を途中で放棄したこと
D 敵国の戦力を見誤ったこと
E 悲痛を酒で紛らわしたこと

〔問四〕 傍線(5)「非欲禍子反也」は「しはんにわざはひせんとほつするにあらざるなり」と読む。これに従って、解答欄の原文に適当な返り点を付けなさい。(返り点以外に何も書かないこと)

〔問五〕 本文の内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 陽穀は子反に好意を寄せていたが、相手にされず恨みを抱いた。

B 陽穀は子反にかいがいしく仕えたことで、恭王の不興を買った。

C 陽穀は子反のためを思って行ったのだが、予期せぬ悲劇を招いた。

D 陽穀は子反を陥れようと策略をめぐらし、それが功を奏した。

E 陽穀は子反に戦場で酒を勧めたため、恭王に殺されてしまった。